

## さようなら 清水 實さん

劉 彩品 (元 中国科学院紫金山天文台)

清水 實さん追悼特集を天文月報1月号(2009年)で拝見して驚きました。12月号(2008年)の訃報は見落としていました。

60年代には岡山天体物理観測所で、70年代には木曾観測所での観測で、私は清水さんには大変お世話になっています。必要な時に必要なところにいらっしゃる方が清水さんだという印象をもちました。木曾観測所のプレートホルダーは重そうで、私が心配していると、清水さんに、「観測者が自分で取り付けることが原則です」と突き放されました。観測の時、プレートホルダーの扱いで苦勞していた時、「ほら」の声とともに、脇から手を出してくれた人がいました。清水さんでした。「ほら」の一言にほっとしました。

その清水さんを1982年に中国に招き、中国大陸の北から南へ、北京天文台、紫金山天文台、雲南天文台と南京天文儀器工場を3週間かけて見てもらったことがあります。数年後、中国初めてのCCDカメラが雲南天文台の望遠鏡に取り付けられたのですが、技術陣の中心となった一人は東京天文台(当時)で学んできた技術者でした。彼は60年代中国のいわゆる文化大革命の時期に大学を卒業し、十数年の政治混乱期を仕事もなく過ごしてきました。仕事はしたいが、何から着手していいかわからずに苦惱していた時に清水さんに出会いました。清水さんはこの若者に対して、東京天文台に勉強に来られるよう尽力されました。清水さんにとってわずか数日の雲南天文台滞在でしたが、その後の中国天文界に必要な人材にチャンスを与えることを考えてくれたのです。

90年代、美星天文台の建設計画の中で、望遠鏡を南京の天文儀器工場で作る話、また、紫金山天文台に置かれている渾天儀のレプリカをモニュメントとして作る話が出てきました。それを聞いた時、日中の天文界で共同作業ができることへの期

待感はありましたが、中国の技術が国際的に通用できるかのほうが心配でした。その時期の天文儀器工場は1メートル級の鏡面を研磨する装置はもっていましたが、鏡面精度を安定な条件で測定するような実験室はなく、器用な技術者の個人プレイに頼っていました。清水さんは私たちの不安に対して、「大丈夫だよ、一緒に考えてやろう」と言いました。外国からの発注を初めて受ける中国の技術者にとって「一緒に考えてやろう」の一言は、勇気と励ましを与えてくれるものでした。

いつだったか、「家では老人が老人の面倒をみているよ」と清水さんがつぶやいた時、笑ってしまいました。深刻なお話ですが、清水さんの口から出ると、ほのぼのとした笑い話に聞こえてくるのです。

中国の哲学者、莊子は『夫大塊載我以形、勞我以生、逸我以老、息我以死、故善吾生者、乃所以善吾死也』(天は我に身体を与え、労役のために生を与え、安らぎのために老いを与え、休息のために死を与える。生を善しとするならば、死もまた善しとすべきであろう)と書いています。それはそうだとすると、清水さんの「休息」によって、清水さんの「一言」や「つぶやき」が聞けなくなるとすると、寂しさを禁じえません。



1982年雲南天文台本館前にて。  
右から清水実さん、小暮智一さん、小平桂一さん、劉彩品。